

音 楽 の 力

主幹教諭 中村 昌子

このところ暖かい日々が続き、春の足音が聞こえてくるような毎日となりました。先日2月16・18日におわかれ音楽会が行われました。今年もたくさんの保護者の皆様においでいただき、ありがとうございました。

本校の伝統であるおわかれ音楽会は、1年生～5年生が6年生に向けての感謝の気持ちを伝える合唱と合奏、そして、それに応えて6年生が自分たちの思いきりのメッセージを込めて演じるオペレッタで構成されています。大好きな6年生に向けた気持ちが痛いほど伝わる1年生の歌声、次は任せてほしいという責任感と緊張感の伝わる5年生の演奏、他の学年も皆素晴らしく、涙された保護者の方も多くいらっしゃると思います。本当に音楽の力は素晴らしいと実感する二日間でした。

実は私は2月11日から16日まで、海外帰国子女財団の事業の一環として、海外の日本人学校で出された課題に対してのサポートをするために、ポーランドのワルシャワ日本人学校に行っていました。ワルシャワはポーランドの首都ですが、日本人の数はそれほど多くなく、ワルシャワ日本人学校は小学校1年生から中学3年生まであわせても18人という家族的な学校でした。授業を見せていただいたり、ワルシャワについて学ぶための副読本の活用法について話し合ったり、大変有意義な出張となりました。

さてそんな中で、ワルシャワの市内を少し観光する時間がありました。私の印象に強く残ったのはショパン記念館とワルシャワ蜂起博物館です。ポーランド出身のショパンは「ピアノの詩人」として世界中に素晴らしい音楽を広めた偉大な作曲家です。ショパン大学という音楽大学もあり、3年に一度開かれるショパンコンクールには世界中からピアニストの頂点を目指す若者が集います。街中のベンチにはショパンのピアノ曲が流れるしくみがあったり、横断歩道はピアノの鍵盤の柄になっていたりするなど、ショパンに満ちあふれた街でした。一方で、ポーランドは第二次世界大戦でドイツ軍の攻撃を受け、ワルシャワの街は壊滅的に破壊されました。ドイツ軍に負けることを始めから覚悟し、それでも祖国のために蜂起したワルシャワの人々の悲しい歴史の詰まった「ワルシャワ蜂起博物館」は、日本の広島にある「原爆資料館」のように戦争の悲惨さを世界中の人々に伝える場所となっています。当時、特にポーランド系ユダヤ人の人々はワルシャワ・ゲットーと呼ばれる隔離地帯に押しやられ、大変な迫害を受けました。その凄惨な日々の中で、生き抜いた実在のピアニスト、ウワディスワフ・シュピルマンを描いたポーランド出身のロマン・ポランスキー監督の映画「戦場のピアニスト」をご存じですか。2003年のアカデミー賞では監督賞をはじめ、主要3部門を受賞した名作です。ご覧になっていない方には是非見ていただきたい作品です。私は今回のポーランド訪問を前に改めて鑑賞してみました。

映画のクライマックスで、多くの人々の協力の中、なんとかワルシャワの街の中で一人潜んで堪え忍んで生活していたシュピルマンが、とうとうドイツ将校に見つかってしまうというシーンがあります。その時、ドイツ将校はシュピルマンがピアニストであることを知り、廃墟の中に残されていたピアノを弾くように命じます。シュピルマンは祖国の偉大な作曲家であるショパンのバラードをその将校の前で演奏します。戦争の悲惨さ、家族や仲間を失った悲しみが込められたその演奏に、ドイツ将校は胸を打たれ、シュピルマンをその場にかくまってくれたのです。音楽の力は、戦争の悲惨ささえも乗り越え、人の心を動かすのだという素晴らしい場面です。

ワルシャワから帰ってきてすぐにおわかれ音楽会の子どもの演奏に触れました。ポーランドで体験したショパンの偉大さと戦争の悲しみ、それを乗り越えた音楽の力。一方で大好きな6年生に思いを伝えようとする笑顔に満ちた音楽の力。誰に、どんな思いを伝えるかは全く別のシーンではありましたが、音楽がもつ力の大きさを実感した日々となりました。6年生が伝えたかった「歌の力」。歌は多くのことを実現させ、人の心を支えてくれます。大泉の子どもたちも音楽の力、歌の力に支えられながら、素晴らしい毎日を送ってくれることを心から願います。

式です。(11:00頃下校)